

熊切 拓

東京大学大学院人文社会系研究科研究員

cyberbbn@gmail.com

要旨

本発表では、アラビア語チュニス方言（北アフリカ、チュニジア共和国）における、*ma:-* と *-f* が述語を挟むことによって作られる否定文を取り上げた。物語テキストから資料を収集し、この否定文がSV構文では現れるのに対して、主題のないVS構文で現れないことを指摘した。その理由として、VS構文の現実的な事態を述べる機能と *ma:-* と *-f* 否定文の表す非現実的否定とが相反しているからである、という解釈を述べた。さらに、SV構文が非現実的な陳述と結びつく理由についても、主題について、話し手の想像する解釈を述べるという機能が、非現実性にも関わりをもつためであると考察した。

1. 本発表の課題

事態が現実の領域ではなく、想像の領域にあることを表す非現実性は、しばしば否定と関連づけられてきた。本発表は、アラビア語チュニス方言の否定と主題化の関係の分析を通じて、非現実性が主題化とも関連を持つことを指摘する。この言語では、一般的な否定文は、動詞などの述語を *ma:-* と *-f* で挟むことによって作られる。

- (1) *ma:-qa:l-f* *da:r-u:* *wi:n*
 NEG-彼は言った-IRR 家-彼の どこか
 「彼は自分の家がどこか言わなかった」 (I, p.15, 1.5)

発表者は以前の研究において、*-f* が非現実性を表し、それゆえ、*ma:-* と *-f* による否定文は「非現実的な否定」であること（熊切 2019）、この二要素による否定文の成立に主題が関与していること（熊切 2022）を指摘した。

本発表では物語テキストを調査し、「非現実的な否定」である *ma:-* と *-f* による否定文が無題文では現れない可能性があることを指摘し、その上で、主題文と非現実的否定の意味的な関連を考察する。

2. アラビア語チュニス方言について

アラビア語チュニス方言（以下、チュニス方言）は、現代アラビア語諸方言のひとつであり、北アフリカ、チュニジア共和国の首都チュニスを中心に広く用いられている（Singer 1984, Gibson 2009）。

動詞には完了形と未完了形があり、人称・数・性によって活用する。名詞には男性と女性の2つのクラスがあり、単数形と複数形がある。

本稿の資料として、チュニス方言による物語集である『アル＝アルウィー物語集』（Al-ʿArwi:, ʿAbd-al-ʿAziz (1989) *hika:ja:t al-ʿArwi: Vol. I-IV. 2nd edition. Tunis: Al-Da:r Al-Tu:nisi:ja li-l-Na:fr*）を利用した。引用にさいしては、訳文末の（）内に、ローマ数字で巻番号、アラビア数字でページ番号（p.）と行番号（l.）を記した。

3. アラビア語チュニス方言の否定の概観

本節では、アラビア語チュニス方言の「*ma:-* と *-f* 否定文」（3.1.）と主題との関連（3.2.）について概観する（詳しくは熊切 2019, 2022 を参照されたい）。

3.1. *ma:-* と *-f* 否定文

チュニス方言の否定辞（NEG）には *ma:-* と *la:-* の2種があるが、このうち、*la:-* は特定の構文でしか現れない（(11)を参照されたい）。本発表では *ma:-* を中心に扱う。

否定辞 *ma:-* が、非現実性を表す接尾辞（IRR）*-f* と共起すると、一般的な否定文となる（本発表では

「ma:- と -j 否定文」と呼ぶ)。

いっぽう、ma:- は、否定極性語と共起した場合、「いかなる～も～ない／しない」という全面的な否定を表す否定文となる(本発表では「ma:- のみ否定文」と呼ぶ)。

次の(2)は ma:- と -j 否定文、(3)は ma:- のみ否定文である。

(2) w-hu:wa ma:-ʃqal-ha-ʃ

そして-彼 NEG-気がつく PERF.3SG.M-彼女を-IRR

「そして彼は彼女に気がつかなかった」(I, p.120, l.12)

(3) ʃla:kulli:ħa:l ma:-fa:t-na:

なににせよ NEG-過ぎ去る PERF.3SG.M-我々を **ʃajj**

「なににせよ何も我々から過ぎ去ってはいない(=我々はまだやり直せる)」(I, p.57, l.7)

3.2. ma:- と -j 否定文と主題

ma:- と -j に挟まれうるものは、動詞句、前置詞句、特定の名詞句、特定の副詞・形容詞のいずれかが述語であるときである。このうち、存在を表す存在文を作る副詞・形容詞を除いて、これらの述語は、主題文の述語となりうる点で共通している。すなわち、ma:- と -j に挟まれる述語を持つ否定文は、構造的に主題文に類似している。

ここで、チュニス方言の主題文について概観する(詳しくは熊切 2018 を参照されたい)。

チュニス方言では、文中の要素を文頭に置くことで主題化することができる。その際に、その主題に一致する人称要素(動詞屈折辞、対格人称接尾辞・属格人称接尾辞)が、主題が評言内部において占めていた位置に現れて代行する。以下の(4)(作例)の(4a)は主語が主題となった場合であり、動詞が主題に一致している。(4b)は目的語が主題となった場合であり、動詞句の一部である対格人称接尾辞が主題に一致している。

(4)a. inti: xalli:t-ni:

あなた 放置する PERF.2SG-私を

主題 評言(動詞が主題に一致)

「あなたは私を放置した」

b. a:na: xalli:t-ni:

私 放置する PERF.2SG-私を

主題 評言(対格人称接尾辞が主題に一致)

「私はあなたが放置した」

述語となる動詞句、前置詞句、特定の名詞句が、何らかの人称要素(動詞屈折辞、対格人称接尾辞・属格人称接尾辞)を含み、その人称要素が主題と一致している場合、その述語は ma:- と -j で挟むことができる。

上の(2)では主語 hu:wa が主題化されており、その人称は動詞 ʃqal の屈折辞(3人称単数男性形)として表示されている。次の(5)では前置詞句が ma:- と -j に挟まれており、そこに含まれる属格人称接尾辞 -hum が主題の n-nsa: と一致している。

(5) ʃla:xa:ʔir n-nsa: ma:-fi:-hum-ʃ a:ma:n

なぜなら DEF-女 PL NEG-中に-彼女たちの-IRR 信用

「なぜなら、女たちは、彼女たちの中に信用がないからだ(=女というものは信用できない)」

(I, p.115, l.11)

ただし、ma:- と -j 否定文では、主題が明示されない(1)のような場合も多く、その点で主題文と異なる。

いっぽう、ma:- と -j で挟むことのできない述語も存在する。それらは、主題となりうる人称要素を含ん

でいなかったり、そもそも人称要素がない述語である。そのような場合には、主語に一致した人称辞を *ma:-* と *-f* が挟んだ「否定人称句」が述語の前に現れ、*ma:-* と *-f* 否定文が作られる。次の (6a) では述語に主語に一致した人称 (2 人称単数) が含まれておらず、それゆえ (6b) のように *ma:-* と *-f* で挟むことができない。

- (6a) *inti: min-ummt-u:*
 あなた から-ウンマ-彼の
 主題 述語
 「あなたは彼のウンマ (ムハンマドのイスラーム共同体) に属している (=あなたはムスリムだ) 」
- b. **inti: ma:-min-ummt-u:-f*
- c. *inti: ma:-k-f min-ummt-u:*
 あなた NEG-あなた-IRR から-ウンマ-彼の
 主題 評言 (否定人称句 述語)
 「あなたは彼のウンマに属していない (=あなたはムスリムではない) 」 (II, p.309, 1.4)

そこで、(6c) のように *inti:* に一致する人称辞を *ma:-* と *-f* で挟んだ *ma:-k-f* が述語の前に現れ、*inti:* を主題化することで *ma:-* と *-f* 否定文が形成されることとなる。すなわち、あたかもその主語を主題とする主題文に変換することで、*ma:-* と *-f* 否定文を成立させるのである。

上記のように、*ma:-* と *-f* 否定文には、主題が深く関わっている。

4. 動詞文の語順と否定

4.1. 動詞文の語順

ここでは、チュニス方言の動詞文 (動詞が述語となった文) について概観する。

動詞文は、動詞 (V) ・主語 (S) の順になる V S 構文、主語 ・動詞の順になる S V 構文、主語が省略された V 構文の 3 種がある (熊切 2021) 。

- (7a) V S 構文 *fi-θ-θni:ja qa:lt-ilha: l-aʃru:sa*
 中に-DEF-道 言う PERF.3SG.F-彼女に DEF-花嫁
 「道すがら、花嫁が彼女に言った」 (I, p.20, 1.3)
- b. S V 構文 *si-t-ta:zir l-akhal qa:l-lu:*
 敬称-DEF-商人 DEF-黒い 言う PERF.3SG.M-彼に
 「黒い商人殿は彼に言った」 (I, p.115, 1.9)
- c. V 構文 *qa:l-lu: tilʃab-ʃi: ʃ-ʃitʃranʒ*
 言う PERF.3SG.M-彼に 遊ぶ IMPF.2SG-IRR DEF-チェス
 「彼 (黒い商人) は彼に言った。『あなたはチェスはやりますか?』」 (I, p.114, 1.15)

V S 構文はこの言語の動詞文の基本語順である。S V 構文は、主語が主題化された文である (上の (2) と (4a) も同様である) 。

上述したように、この言語においては *ma:-* と *-f* 否定文と主題が関連している。そのため、*ma:-* と *-f* 否定文は主題文である S V 構文として現れやすく、逆に、主題化されていない V S 構文にはなりにくいと思定できる。

そこで、本発表では、チュニス方言で書かれた物語テキストを対象に、否定文と主語 ・動詞の語順の関連を調べることにする。

4.2. 動詞否定文の語順

否定文には *ma:-* と *-f* 否定文と *ma:-* のみ否定文の 2 種があり、S のある動詞文には S V 構文と V S 構文の 2 種がある。それゆえ、4 種の構文、S *ma:-V-f*、S *ma:-V*、*ma:-V-fS*、*ma:-VS* がありうることになる。

前節で述べたように、主題化されていない *ma:-V-fS* と *ma:-VS* が現れないか、少ないものと考えられる。

そこで、物語テキストを調べたところ、2700 の文のうち、ma- 否定文が 153 文あり、そのうち動詞文の否定が 109、主語が明示されたもの（すなわち S V 構文か V S 構文）が 38 あった。この 38 を (8) のように 4 種に振り分けると、次のようになった。例とともに示す。

(8)a. S ma:-V-f : 19 例

w-hu.wa **ma:-ʃqal-ha:-ʃ** (=2)

そして-彼 NEG-気がつく PERF.3SG.M-彼女を-IRR

「そして彼は彼女に気がつかなかった」

b. S ma:-V : 8 例

la:kin rʰabb-i: **ma:-jxalli:** **b-hadd**
 しかし 主-私の NEG-放置する IMPF.3SG.M で-誰も

「しかし、我が主 (= 神) は誰も放っておかない」 (I, p.212, 1.7)

c. ma:-V-ʃS : 2 例

a:na: **ma:-jitʃadda:-ʃ** iðʕ-ðʕulm fi:-bla:d-i:
 私 NEG-通る IMPF.3SG.M-IRR DEF-不正 中に-国-私の

「私の国では不正が通用しない」 (I, p.126, 1.2)

d. ma:-VS : 9 例

ʃla:kulli:ha:l **ma:-fa:t-na:** **ʃajj** (=3)

なににせよ NEG-過ぎ去る PERF.3SG.M-我々を 何も

「なににせよ何も我々から過ぎ去ってはいない (= 我々はまだやり直せる)」

S V 構文である (8a)、(8b) が全体の過半数である 27 例を占めるといえるのは想定に近い。そのいっぽう、V S 構文は全部で 11 例であり、特に ma:- のみ否定の (8d) は 9 例と多く、想定とは異なる。

そこで、(8c)、(8d) のそれぞれについて詳しく検討することとする。

4.3. V S 構文と ma:- と -ʃ 否定文

ma:- と -ʃ 否定文で V S 構文となるものは、今回の調査では 2 例あった。そのうちのひとつが (8d) である。しかしながら、この例は主題文でもある。すなわち、(8d) では動詞の後に主語 iðʕ-ðʕulm が現れているが、そのいっぽう、文頭に置かれた a:na: は、前置詞句 fi:-bla:d-i: の 1 人称単数の属格人称接尾辞に一致しており、主題であると考えられる（ただし、述語には含まれないので ma:- と -ʃ には挟まれえない）。

もうひとつの例は (9) である。

(9) ʃand-i: tʰa:bu:na **ma:-mallsi-ha:-ʃ** bint mrʰa:
 にある-私の パン焼き窯 NEG-ロクロで作る PERF.3SG.F 娘 女

「私には、女の娘が作らなかったパン焼き窯 (= 人間が作ったのではない魔法のパン焼き窯) がある」

(I, p.210, 1.13)

(9) では、不定名詞 tʰa:bu:na の後に V S 構文の ma:- と -ʃ 否定文が後続している。この場合、2 つの文として解釈できるが、不定名詞の後には関係詞が現れないため、否定文を関係節として捉えることができる。チュニス方言においては、関係節に修飾される名詞句は、主題と同じように、関係節内にこれに一致した人称要素が現れる ((9) の場合は、-ha:)。それゆえ、この例もまた主題化と関連づけて解釈できる。

すなわち、ma:- と -ʃ 否定文で V S 構文となる 2 例は、主語以外の要素が主題化された主題文であり、その意味では、S V 構文の ma:- と -ʃ 否定文の (8a) と同じグループに含めることができる。

それゆえ、今回の資料には、主題文ではない ma:- と -ʃ 否定文の例は存在しない、といえる。

5.1. 現実性と非現実性

ある事態が事実として捉えられているか、想像や仮定の領域に属するものとして捉えられているかを、表示する文法的手段を多くの言語が持っており、意味的には、現実性 (realis) ・非現実性 (irrealis) との名称で区別されている。非現実性は、未来、習慣、条件などにかかわり、否定や疑問とも密接な関係を持つ (Elliot 2000: 66-67, Palmer 2001: 53)。

チュニス方言の否定文を現実性・非現実性の観点から捉えると、現実的な否定を表す現実的否定文と、非現実的な否定を表す非現実的否定文の2種がありうる (熊切2019)。

現実的否定とは、ある否定的な事態を現実には位置づけられるものとして述べる否定である。現実にかかわっている (と話し手と聞き手が了解する) ため、現実的なものとみなすことができる。いっぽう、非現実的否定とは、ある肯定的な事態が現実には位置づけることができない、と述べる否定である。現実そのものについては何のかかわりもない (と話し手と聞き手が了解する) ため、非現実的なものとみなすことができる。

否定辞 *ma:-* は現実的否定を表す否定辞であり、*-j* は非現実性を表す接尾辞 (IRR) である。それゆえ、*ma:-* のみ否定文は、現実的否定を表すが、*ma:-* と *-j* 否定文は非現実的否定を表す。次の (14) は *ma:-* のみの否定 (現実的否定)、(15) *ma:-* と *-j* の否定文 (非現実的否定) である。

- (14) hu:wa qa:l ja:-fakka:ja w-hi:ja qa:lit ma:-sbaq
彼 言う PERF.3SG.M よ-訴人 pl そして-彼女 言う PERF.3SG.F NEG-先に行く PERF.3SG.M
min-ni: hadd
より-私の だれも

「彼 (役人) は言った。訴人たちよ (入れ) ! そして彼女は言った。誰も私より先に来なかった (=自分が1番目だ)」 (I, p.123, 1.2)

- (15) wild ʕamm-ha: ma:-za:-j zaʕma a:j ʕfa:-lu:
子ども おじ-彼女の NEG-来る PERF.3SG.M-IRR もしかしたら 何 起きる PERF.3SG.M-彼に
「彼女のおじの息子 (=彼女の夫) は (旅から) 戻ってこなかった。もしかしたら彼の身に何か起きたのだろうか?」 (I, p.119, 1.11)

(14) では、「誰も私より先に来なかった」という否定的事実を現実には起きた事実として述べ、その事実により、自分が1番目に訴えを行うことができると主張している。

こうした現実的否定を表す否定文は、チュニス方言においては何らかの否定極性語 ((8d)、(10)、(11) も同様) をともない、意味的には、「いかなる～もない」という否定の全面性を表す。

否定の全面性とは、他の事態の可能性をすべて排除するものである。いっぽう、「現実には起きた事実」もまた、現時に起こりえた他の事態を排除するものである。それゆえ、全面的な否定は、他の事態の排除という点で「現実には起きた事実」と類似することとなり、この類似性により、全面的な否定は現実的なものとして捉えられることになる。

(15) は、(14) のように現実には何が起きたか、ということ述べるのではなく、「彼女の夫が戻ってきた」という肯定的事態を否定することで、現実には起きなかったことを述べている。そして、そのことを通じて、現実には起きたことが別にあることが示唆される (「もしかしたら彼の身に何か起きたのだろうか?」)。すなわち、この否定文自体は現実そのものとは関わりがないため、非現実的なものと捉えられることとなる。

ここで、動詞と主語の語順との関連に戻ると、現実的否定文 (*ma:-* のみ否定文) は S V 構文でも V S 構文でも現れうるが、非現実的否定文 (*ma:-* と *-j* の否定文) は S V 構文では現れうるが、主題のない V S 構文では現れない。言い換えれば、非現実的否定文にはなんらかの主題がなくてはならない、ということになる。

5.2. 主題化と現実性・非現実性

一般的にアラビア語では、主題のない V S 構文は、(i) 存在や提示を表す、(ii) 主語や文全体を新情報とし

て焦点化する、(iii) 談話において事態を導入する、という機能を持つとされる (Hoyt 2009: 657)。チュニス方言でも、主題のない V S 構文は、事態全体を述べる *thetic* な機能を持つ (熊切 2021)。

すなわち、主題のない V S 構文は事態をそのまま述べるという点で、現実起きた事態を述べるのに適しており、現実性に関わる動詞構文である。

これに対し、*ma:-* と *-f* の否定文は、非現実的な否定である。これは現実にかかわりのない事態を述べる否定であるから、主題のない V S 構文のもつ現実性にかかわる機能と相容れないため、*ma:-* と *-f* の否定文は主題のない V S 構文では現れないか (あるいは現れにくい) と考えられる。

いっぽう、*ma:-* のみ否定文が主題のない V S 構文となりうるのは、この否定文が、否定的事態を事実として述べる現実的な否定を表すからであろう。

ma:- と *-f* 否定文が S V 構文ともつ強い結びつきも、非現実性とのかかわりから解釈ができる。主題化とは、ある構造を持った文を「主題の部分とそれ以外の部分の 2 つから構成される構造」(野田 1994:50) へと変換することである。この新たな構造への変換によって、文は、主題と、それについて述べる評言という 2 つに分けられる。評言は、例えば (2) のように、主題についての事実的な事態を述べる場合もあるが、そのいっぽう、主題についての解釈を述べる場合もある。その場合、解釈自体は、話し手の想像の領域にあり、必ずしも現実と関わりがある必要はない。それゆえ、主題文は、常に現実性に関わる V S 構文とは異なり、非現実的な事態の陳述とも結びつきやすいのではないかと考えられる。

本節をまとめれば、V S 構文は現実的な事態を述べる構文のため、非現実的な否定である *ma:-* と *-f* 否定文は出現しにくいのにに対し、S V 構文は、主題についての解釈を述べる構文であるため、非現実的な否定文が現れやすい、ということになる。

6. まとめと課題

本発表では、アラビア語チュニス方言の *ma:-* と *-f* 否定文を取り上げ、これが主題のない V S 構文としては (少なくとも今回の資料では) 現れないことを指摘し、その理由として、V S 構文の現実的な事態を述べる機能と *ma:-* と *-f* 否定文の表す非現実的な否定とが相反しているからである、という仮説を述べた。

さらに、S V 構文が非現実的な陳述と結びつく理由についても、主題について、話し手の想像する解釈を述べるという機能が非現実性にも関わりがあるため、と考察した。

非現実性が、否定と深い関係を持つことについては、先行研究で指摘されてきたが、主題化とも関係がある可能性については、十分な言及がないように思われる。その一端を明らかにしたのが、本発表の意義である。今後は、より多くの資料を収集し、今回の分析の妥当性をより高めていきたい。

略号

1/2/3 : 1 人称、2 人称、3 人称、DEF : 定冠詞、F : 女性、IMPF : 未完了形、IRR : 非現実モダリティ辞、M : 男性、NEG : 否定、PERF : 完了形、PL : 複数、SG : 単数、- : 形態素境界。

参考文献

- Elliott, Jennifer R. 2000. Realis and irrealis: Forms and concepts of the grammaticalisation of reality. *Linguistic typology* 4. 44-90.
Gibson, Maik 2009. Tunis Arabic. *Encyclopedia of Arabic language and linguistics* Vol. IV, 563-571. Leiden/Boston: Brill.
Hoyt, Frederick M. 2009. Verbal Clause. *Encyclopedia of Arabic language and linguistics* Vol. IV, 653-659. Leiden/Boston: Brill.
熊切拓 2018. 「アラビア語チュニス方言における主題化」『東京大学言語学論集』40. 119-133.
熊切拓 2019. 「アラビア語チュニス方言における否定と非現実モダリティ」『言語研究』156. 97-123.
熊切拓 2021. 「アラビア語チュニス方言の V S 構文による語りの構造化」『言語研究』160. 97-122.
熊切拓 2022. 『アラビア語チュニス方言の文法研究—否定と非現実モダリティ (ひつじ研究叢書(言語編)第187巻)』ひつじ書房。
野田尚志 1994. 「日本語とスペイン語の主題化」『言語研究』105. 32-53.
Palmer, Frank. R. 2001. *Mood and modality*. Second edition. Cambridge: Cambridge University Press.
Singer, H-R. 1984. *Grammatik der Arabischen Mundart der Medina von Tunis*. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
Versteegh, Kees, Mushira Eid, Alaa Elgibali, Manfred Woidich, and Andrzej Zaborski. (eds.) 2009. *Encyclopedia of Arabic language and linguistics* Vol. IV. Leiden/Boston: Brill.